

# 石川モンゴル親善協会だより

～ Байгаль Эх Байгал Эへ 母なる自然 ～

## 第10(特集)号

石川モンゴル親善協会事務局  
事務局長：藤木正範  
〒920-0862 金沢市芳斉 2-11-18  
TEL : 090-9449-4323  
E-mail : fujiki4323@gmail.com

### モンゴル国スタディツアー 2015



サイハンオボー村の小学校にて。校長先生（前列中央）、教頭先生（後列左3番目）、アマル村長（後列右3番目）

#### ●日程（出発日の違いで2グループに分かれる。 ※途中で合流）

先発隊：2015年8月28日（金）～9月4日（金）

本隊：2015年8月30日（日）～9月6日（日）

#### ●訪問先（主な活動）

- ・92番学校（日本語図書の寄贈・日本文化紹介等交流会・見学）
- ・ウランバートル市内（JICA、カンダン寺、モンゴル国立博物館、チョイジンラマ博物館など）
- ・マンダゴビ（ボルボロの丘、イフガザリチョーロなど）
- ・ハラホリン（エルデニ・ゾー、亀石、突厥碑文博物館、遊牧地、サジーの植林など）
- ・サイハンオボー村（近隣の寺院跡散策、サジー畑・フェルト製品の見学、山羊の乳搾り・酒づくりなど）

#### ●目的

モンゴル親善協会の活動をより活発にするため、博物館をはじめ観光地や史跡の見学、現地生活の体験、現地の人々との交流はもちろん、サイハンオボー村との絆をより一層深め、貢献活動の内容を明確にする。

#### ●参加者

石川モンゴル親善協会員8名

## 活動報告 2015夏訪問団 団長 沢田 勲

## モンゴルの子供たちとの交流

本協会が「モンゴル国スタディツアー」を企画して今年で三回目になりますが、今回のスタディツアーは様々な目的があって、それらをすべてこなすため、モンゴル国のほぼ中央部を車で駆け巡り、総延長1000キロを超す大旅行でした。

本年もウランバートル92番学校の始業式に招かれ、モンゴル語で挨拶する機会を得ました。私のモンゴル語がどの程度理解されたか自信がありませんが、子供たちの目が輝いていたことが印象に残りました。



その後、ウランバートルを出て次の目的地ドントゴビ県のサイハンオボー村に向かいましたが、今回は私のわがままでハラホリンを経由しました。ハラホリンはウランバートルの西400キロの地点で、歴代の諸王朝（突厥、モンゴル帝国）の都があり、ハンガイ山脈とオルホン川が流れ、モンゴル高原で最も恵み豊かな土地であります。今回見学したホショツアイダム博物館は、6世紀中葉から約200年にわたりモンゴル高原を支配した突厥王朝が遺した碑文が展示されていました。突厥は、現在のアナトリア地方に住んでいるトルコ人の先祖で、トルコ共和国は世界で最もモンゴル国と友好関係が強い国と言われています。そのため、トルコ政府の援助によって、ハラホリンから博物館に至る約50キロには見事に整備された高速道路が走り、古のシルクロードの姿が思い浮かばれました。

ハラホリンを出た私たちは、次の目的地ドントゴビ県サイハンオボー村へ向かいました。途中、民家のゲルに泊まり馬乳酒や羊肉をいただきましたが、私自身長旅の疲

れとモンゴル料理攻めで体調を壊してしまったのがとても残念でした。サイハンオボーでは出迎えたアマル村長の熱烈なる歓迎を受けました。サイハンオボーではサジーなどの農産物が栽培され、ごみ処理の問題、ツーリズムの振興、フェルトの製品化と流



通などが語られ、今後本協会があらゆる手立てを求めて支援していくことが確認されました。同時に村の学校によって子供たちと交流をしました。子供たちがモンゴル語で「幸せなら手を叩こう」を謳って私たちを歓迎しましたが、私はモンゴルの子供たちの一生懸命な姿に感動を覚えました。

一般にモンゴルの地は大草原の国として知られていますが、今回訪問した地帯は、草原、山脈、湖沼、河川、砂漠と様々な地層をかかえていることを知り、驚きとともに大きな感動を覚えました。モンゴル国は300万を超える人々が暮らしていますが、人口の70%が20歳以下の若者が占め、少子高齢化が進む日本とは大きな違いがあります。その意味では将来性豊かな国と言えましょう。北にロシア、南に中国と接し、複雑な外交関係が強いいられていますが、日本に対する友好の絆は強く、その期待が大きいことが今回の訪問で強く感じられ、より一層モンゴルとの友好関係を推し進めることが大切だと思いました。





## 活動報告 藤木正範

## 愉快で爽快な旅 JICA モンゴル事務所とサイハンオボー村を訪ねて

何年も前から大草原を見たいと言っていた高校同期の福田さん、山が大好きな久保村先生も一度モンゴルの星空を見ようと参加をきめた。他の皆さんは、沢田先生、奥田先生、杉原さん、山田さん、森さん、それに僕は2度3度目・・・目の訪問だった。なつかしいモンゴルの友とまた会いたいと言うのが一理由だが島国日本に居ると広大な陸の海原、大草原をまた見たくなるらしい。コースはほぼ昨年と同じ、ホテルも手配の自動車も運転手さんも同じだ。昨年添乗してくれたバヤルマさんや通訳のツェツェグさんはお目出たで休養した。今年もまた1泊はオクチャブリ先生のところをやっかいになった。日程は昨年に比べると1週間遅いせいかな雨に降られるなど天候が落ち着かなかつたが仲間は気心が知れていて楽しい旅行になった。



写真：沢田副所長と荒井企画調査員

第一日目のウランバートル市内見物の前に全員でJICA(ジャイカ)モンゴル事務所を訪問した。沢田副所長、荒井

企画調査員に應對していただいた。今までのそして現在の活動をお聞きた。

毎年数十名の日本の若者やシニアがボランティアがモンゴルで活躍していることを知る。今までのODA(政府開発援助)で実施されてきた高架橋建設などの無償有償の協力事業や教育の分野、植林などの草の根技術協力事業のJICAの活動の歴史をお聞きた。

モンゴル国が「最も親しくすべき国」のアンケート調査で日本が第一位となっているのもこんな地味な努力の背景があるからだろう。

ハラホリンより少し先に足をのばして沢田先生の案内で突厥碑文の小さな博物館を見学した。唐の時代奈良時代のころの出来事である。この草原の下には壮大なドラマが眠っている。

大勢の武者たちが東に西に疾走して遊牧民は歓声をあげたり蹴ちらされたりしただろう。

思いを馳せて見渡す限りの草原の地平線の彼方からの風の香りを嗅ぐ。

草原を走りながら以前大串先生から、草原の草の丈は自然のままならもっと伸びている過放牧ではないかというお話を聞いたことを思い出した。「モンゴルの五畜(羊、山羊、牛、馬、駱駝)の頭数が2014年の調査で5,000万頭を超えモンゴル史上最多記録を更新した。1990年までの社会主義時代は概ね2,300万頭前後でコンスタントに推移していたが市場経済体制移行後、ゾド(寒雪害)による大幅な減少がありながらも増加が著しい。増加の理由として、体制移行の混乱に伴う失業者の遊牧民化や飼養頭数の自由化、カシミヤを求めた山羊の急増、遊牧民の経営規模の拡大など史上原理にもとづく要因があげられる。山羊の増加が著しいのはゴビ地域や砂漠性草原地帯のドントゴビ、ウブルハンガイ、バヤンホンゴルなどである。」(「モンゴルの頭数の増加とその特徴」日本とモンゴル No. 130 鈴木由紀夫)モンゴル国統計局のデータからも頭数は増加してきている。



写真：馬乳酒を作るアマル村長

サイハンオボー村の僕らが泊まったバイラさんのところでも、乳しぼりを学んだのはカシミヤを取る山羊で羊ではなかった。

サイハンオボー村ではアマル村長と村と私たちの協会の間で覚書をとりかわした。

村と私たちの協会が互いにその自然環境を学び保全に努めることや地域の伝統的な産業を持続発展させるために連絡を取り合い協議をしてこれから計画をたてて実行することが明記されている。

深夜発の帰りの空港に向かう前の夕食会に今度の旅行でお世話になった皆さんをご招待しました。自動車の運転をしたウッチーさんご夫婦、添乗員兼通訳だったゾロとナランさん(ナランは昨日誕生日だった)バヤルマさん、ボルさん(元金大留学生)ドルジ・シゲ夫妻(通訳、元大臣秘書官)皆さん共に数日間過ごしたので良い思い出や笑い話がありなごやかな宴になった。またの再会を願って名残りおいしい気持ちいっぱいでお別れを告げた。

ゲル家長の勇姿 2015

‘家族の一体化を妨げなく 苦勞されている事柄について支援できれば良い’との思いでゲルを訪問しました。放牧生活は 夫婦二人で運営していました。

2015年の訪問は9月上旬で子供たちは平日村に住み学校です。(2014年の訪問は8月下旬で学校は休みの為、家族全員がゲルで生活)



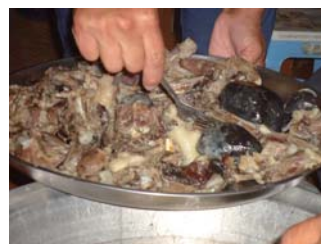
“馬は2～3時間おきに搾乳、山羊は朝・夕の搾乳が必要”と聞きました。馬の乳から「馬乳酒」、山羊の乳から「チーズ」を作っています。そして羊は必要な際に解体し、自分たちが食す「羊肉」となります。水の乏しいゴビ砂漠では 2トントラック上に大きなポリタンクを積み水を蓄えていました。

遠く放牧した馬・羊・山羊をゲルに移動させ、搾乳する行為は多大な労力と技術が必要と感じられます。ゲルの家長は勇敢に仕事し、妻はサポートします。夜になり解体したばかりの羊肉を食しながら、自家製ウォッカを飲み、モンゴルと日本の歌をみんなが歌い合い、モンゴルのジャンケンをして楽しみました。



2014年・2015年と連続して訪問することで 信頼関係が芽生え、何らかの支援へと進むのかと感じました。

今回 サンハンボー村と



石川モンゴル親善協会は、『互いにその自然環境を学び保全に努め、地域の伝統的な産業を持続発展させるために協力する』との覚書を締結しました。“このこと具体的な成果を得るように地道に活動しよう”と考えます。

PS

《 エピソード① 》

村長は、森 (MOLI) を “ウマ” と呼ぶようになった

《 エピソード② 》

ゲルの家長は、森の筋肉 (ふくらはぎ) を褒めた

《 エピソード③ 》

サジー畑のお母さんは、「外国人が自分の写真を沢

山撮ったが贈られたのは初めてだ」と喜んだ





— モンゴルの青い空 —

昨夜から降り続けていた雨で、大地がぬかるんでいる。そのぬかるみに車がとられた。四駆のエンジンを噴かすたびにさらに深みにはまりそうである。全員が車から降りてぬかるみの中で押すがどうにもならない。

今朝サイハンオボー村を出発して数時間になるが、すれ違った車は1台もない。どうも携帯電話もつながらない場所らしい。



広大な見渡す限りのモンゴルの草原で、このまま脱出できなかつたらどうなるのだろうか。



今回のモンゴル・スタディツアー（8/30～9/6）は、当協会としては新たな親善活動のあり方を模索することがねらいであった。私にとっては初めてのモンゴルであり大草原も大いに楽しみたかった。

ウランバートルからハラホリン、サイハンオボーを訪れウランバートルに戻ってくる。町から町へは借り上げたワゴン車で、6時間から10時間を要する。道路整備が進められているが、まだまだデコボコの悪路や草原・沙漠が多い。

ハラホリンは、かつてはカラコルムと呼ばれたモンゴル帝国時代の首都が置かれていた地である。多くの人々が行き来したシルクロードの面影はないが、世界遺産に登録された古い寺院跡や突厥（とっけつ）時代の考古学遺産を収めた小さな博物館があった。

サイハンオボー村でゲルの生活を体験した。ゲルの夫婦は、数百頭の馬・羊・山羊の遊牧を行っている。この時期、家畜の世話が忙しく馬は2時間おきに、羊は日に2回搾乳している。ジープやバイクも所持している。ソーラパネルが具えられ、各自が携帯電話を持ち、ゲルの中にはテレビもある。先端の科学技術が遊牧生活の中に浸透して来ている。子供は二人いるが村の学校に行っており、金曜の午後に迎えに行き、月曜の朝に送っている。

夕食後もゲルの中で歌を歌ったりして交流を深めた。冬場の手慰みのゲームで、負けたら自家製のウオッカ

の杯をあけるモンゴル式のジャンケンも楽しんだ。昔山行きで経験した楽しいテント生活のように全員で雑魚寝した。



運転手ウッチィさんの機転で、何とかぬかるみを抜けることができた。予定よりずいぶん遅れてウランバートルの街並みに入った。すでに夜の9時を過ぎているのに、市内は車で溢れている。建設ラッシュの工事車両が撒き散らした油と土の匂いが残っている。何か懐かしい。戦後間もない日本を知る我々世代にとって、活気に満ちたあの頃の日本の匂いである。

社会主義から民主国家としてスタートを切った1992年以降、家畜の私有化、土地の無料分配など制度の改革が進められた。そしてウランバートルには全国民の約半数150万人が生活するようになった。遊牧民が牧畜業を捨て都市へ移る流れは止まらなくなっている。自然と共生することで営んできたモンゴルの人々が、否応なしに変革を求めてくる文明と向き合っている。



急激に変わろうとするモンゴルはどのような国になっていくのか、どのような国を創っていくのか、いつまでも関心を持っていたい。モンゴルの人々にとって誇れる母国になって行って欲しいと切に願う。チンギス・ハーン（ウランバートル）国際空港に降り立ったときの青い空は忘れられない。初めて訪れたモンゴルの空が衝撃的に迎えてくれた。透き通った輝く青さであった。モンゴルの未来がああ青空のようになって欲しいと思う。

## 活動報告 (文) 杉原美那子・(編集) 久保村健二

## 先発隊のウラ・オモテ

どんな成り行きかわからないまま、先発隊として、久保村氏と私が二人でモンゴルを旅することになった。山や写真などの趣味は同じ、いろいろ共通点もあり少しは親しい間柄。しかし、もっとも困った共通点はガンコであること。ガンコとガンコが、どんな旅を展開することになるのか？

8月28日、出発の朝。6時、携帯が鳴った。「パスポートが見つからない」えーっ、まさかぁー!? 私の頭は、彼の発明した回転式風力発電機よりも早く回り始めた。万が一の時、一人でも行くべきか、止めるべきか? 結局、少し離れた場所にある仕事場の机の上で発見され、一件落着。初っ端から驚かせてくれる。

砂漠へ出発したのは、29日の昼過ぎ。ずっと来てみたかったという彼は、ジープの窓から興味深げに眺めている。休憩時には、三脚を立て、慎重に高級カメラを調整、タバコを喫い、オシッコもと大忙し。でも、少しも慌てない。こんな広々した風景が好きなんだとくりかえす。2004・5・13年に続いて4回目の私には、少し見慣れた風景。

それでも、新しい発見がたくさんあった。ガイドのゾロさんもドライバーも、



本当に気が利くいい若者たちで、教えられ、助けられた。擬似家族のように、仲良く楽しく旅を続けることができた。近接した座席で、聞いたり、話したり。

遠くに、青い湖の蜃気楼を見たことがあった。コンドルが飛ぶのをまじかで見ただけ。これまであまり気付くことがなかった動物たちの死骸も気になった。ガゼルや馬。砂漠で繰り返される生と死。回り道をしたため、かなり夜遅く、サイハンオポーのキャンプを目指すことになった。草むらの道なき道を急いでいる時、ヘッドライトをあびて光る眼。オオカミだった。群れから離れて5、6頭の馬がじっとしている。不思議に思ってゾロさんに聞くと、仔馬を暑い日差しから守るため、影を作っているのだという。感動した。

遊牧民は、小さい頃からこんな光景を見て、「愛情」を教えられるのかも知れない。

砂漠の第一日目はマンダルゴビ泊。まだ明るいうちに到着。夕食をホテルですませた後、散歩に出かける。ゆったりとした気分。予定通り、空には明るい大きな満月が輝いている。大分前から、私はこの夜の月と天候をチェックし続けてきた。雷雨などと出ていても必ずずれて晴れると信じていた。それには理由があった。



後述する。少し肌寒い、人けのない町を歩きながら、やっぱり無理をしなくてよかったかもと思った。そして思いがけない人と再会したのだ。 といっても

銅像。ナランツァルト氏(元総理大臣)。10年前、藤木さん達と来た時には大変お世話になった。空港もVIP待遇だった。言葉は交わせ

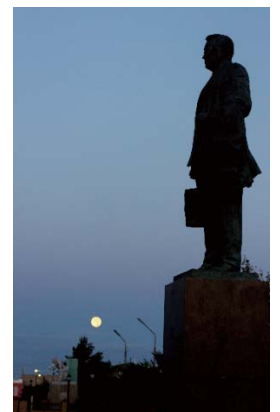
なかったが、プレゼントを渡してもらった時のやさしい眼差しが忘れられない。氏はその数年



後に、砂漠で不慮の死を遂げられた。月の光を浴びている威風堂々とした姿は、

ウーシーマンハンの方を向いているのではないかとそこには、当時の小淵首相による日本の援助で、保養所が建て

られており、裏手の大きな砂山の砂に体を埋める健康法が行われていた。私も体験した。しかし、私が今回の旅で、なぜウーシーマンハンへ一番行きたかったか? それは星空にある。降るような流れ星、それを相棒に見せ、どうだと言いたかった。それでも、現役クライマーと引退クライマーは、寝袋もテントも持って野営してでもと盛り上がったが、諸般の事情を考えると諦めざるをえなかった。楽しい空想だった。あと150km先の場所なのに。ツエツエグさんの配慮で、ジープにテントが積んであった。





ジープと言えば、前輪パンクでやっと町にたどり着き、修理。外へ出て、何気なく車体の後部を見ると、砂まみれの中に「バー」と指で書いた跡。犯人はただ一人。涼しい顔をしている。仕方ない。「ジー」と受けて立つ。顔と行動とのギャップ。わらびしい。後日、その後に補うべきは「カ」であったと聞かされた。どちらでもおなじじゃ。

サイハンオボーへ直行する前に、ゾロさんの提案でイフガザリチョーロという場所へ。岩山の寄り集まった、「世界の中心」と呼ばれる場所。マンダゴビは「ゴビの中心」という意味だそうだが、この国の人々は「中心」が好き



なようだ。あわせて「銅像」も。モンゴル人気質を知る手がかりがありそうだ。「中心」の「中心」は？私達は勝手に丸っこ



い岩山を「中心」と決めた。僧侶が祈っているように見える岩山の前で、一人一人が、そのポーズを真似て写真を撮った。



アマル村長のゲルで泊まった夜、ちょっとしたアクシデントがあった。ベッドで立ち上がろうとして、バランスを失い、私が床で顔面を強打して

しまったのだ。目から火花が。首を打ったかもしれない。絶対安静と勝手に自分で診断。相棒は床に布団を敷いてくれ、最後に両足を伸ばして整えてくれた。そのしぐさが、このまま納棺されるような気分させた。またどこかへ行ってしまった。私が死ぬかも知れないのに、星なんか撮って！暗闇の中でいろいろなことを考えていた。すると、何かが顔の上を。思わずそれを払い落とし、ベッドへ飛び乗った。近くの溪谷で、ダニを髪の毛の中に潜ませたまま、東京へ帰り、太ったそれを取り除いたら、やっと頭痛から解放されたというブログを読んでいたからだ。呆れられたが、たい

したこともなく、翌日から行動できた。人間、そんなに簡単に死なない。

9月1日、92番学校の行事に参加した後は、3日に帰国するまでフリーだった。私は知らない町をぶらぶらするのが好きなのだが、結構暑く、砂漠の後で、ぶらぶらどころかフラフラしている。

ゾロさんに引き続きガイドしてもらって、定番の場所も含め、少し遠出もした。ガイドブックなどでは知



り得ない場所が沢山ある。土地の人に聞くのが一番。最後の日の最後に、ゾロさんの知人のゲルに寄せてもらい、あたたかいもてなしをうけた。真ん中の明かりの下で、色鮮やかな民族服をミシンで縫っている女性がいた。ナーダムをはじめ、沢山お祭りがあって、年中忙しいのだという。人々の明かるい笑い声が聞こえてくるような気がした。



どちらもマメではないから、メモなどなく、共有の残金で、相棒は地図を、私は絵本を買って、チャラということにした。

気ままな一人旅が多い私であるが、介護もしてもらえるし、ザックに荷物を詰めて運んでももらえるし、連れがあるのもいいなと思った。

小松空港に着いてからは、途中でお寿司屋により、そのまま金沢駅へ。翌日の結婚式に出席するために上京する相棒を見送り、先発隊は解散した。

## 活動報告 山田絵美子

## 白い丸い家

ゲル 白い丸い家

昨夏に続いて、モンゴルスタディツアーに参加し、遊牧民の生活に触れ、ゲル宿泊の体験ができた。広い草原に家畜が群れ、ゲルが点在している。平原は広く広くゆるやかに風が吹き渡り、ゲルはそんな中に二、三軒時々現れる。それを過疎というなら過疎かもしれない。けれどもモンゴルではそうではない。家畜の群れに見合って暮らしが在るのです。



ゲル 出入り口の戸は(どこにあっても)南に面し、鮮やかな群青、緑、赤の中に描かれた雲はチベット仏教の文様らしい。戸は大きくないので、身を屈めて入る。円形の床、円筒のフェルトの側面、帽子のように丸い天井、開閉できる丸い天蓋。正面は、主人の座と決まっております昔の日本にもあった横座を思い出す。訪問者は入って左側。主婦は右側。座すれば輪になり、和む。

正面にはタンスが置かれ、その上に仏壇が置かれている。側面のソファー・ベンチは、そのまま畳んだ絨毯の収納所。フェンスで支えられた側面には日常生活品を掛けて置く事ができる。ゲルはフェルトで覆われ、天井も傘のように梁が渡っていてやはり生活用品を挟んだり掛けたりできる。

外側はキャンバス地のような生地で覆ってある。ゲルを固定するために渡してある縄は駱駝の毛で編んだ縄。縦は丸い屋根から放射状に渡され、横は帯紐のように回してある。白い丸い家に焦げ茶の縄は美しく安定し安心感がある。

自家製のチーズをお盆に載せて外の屋根に置いて乾か

していても横に渡した縄が棧の役をしているからずり落ちない。丸い家は多少の風にもびくともしない。丸いので風がすり抜けていく。

ゲルはワンルームだけれど、収納に優れていて感心する。すぐ傍らに納屋ゲルもあって、ストーブ=かまどで自家製のお酒やチーズ作りもする。

ゲルの外にはサテライトアンテナがあり、ソーラー・パネルもあるので、日本の相撲はモンゴルでも同時に観戦できる。

このゲル、家畜が草を求めての移動に合わせて、ゲルを解体し、折りたたんで引っ越しをするということです。(機会があったら見たい)



家畜と共に暮らす。共に暮らす、ここに遊牧民たちの強靭さと優しさを思うのです。気温が氷点下数十度になる厳冬には更にフェルトで覆って防寒するらしい。

昨夏は気候に恵まれモンゴルブルーの空、ゆったりとそよぐ風の平原に魅了された。今夏はあいにくの雨や風で平原の荒涼を味わった。

長く暗い冬には家畜はどうしているのだろうか。平原の月明かり、星明かりの美しさはどんなだろうか想像する。

必要に応じて折りたたんで引っ越しをする遊牧民たち。強くて優しい不思議な魅力は、どこから来るのか。魅せられます。

